

# 生涯にわたって 社会のいたるところで学ぶための方法序説 小学生のためのまちリーフレットを！

松田 道雄

提案…自治体の予算をとって、小学生のためのまちのリーフレットを作成しませんか？

駅や観光地などに行くと、自治体で作成した観光パンフレットがたくさん置かれています。皆さんはどこかのまちに行かれた時などには、それらのパンフレットを活用されるでしょうか？

一般に、そのような観光パンフレットは、成人の観光旅行者などを想定して作成しています。もちろん、家族旅行などで、子どもも読むことができますが、平易な表現にはなっていない。本号では、小学生を読者対象にしたまちのリーフレット（パンフレットと言うと大げさになるので）を、自治体の予算をちゃんととって作成することを働きかけてみませんか、という提案です。その具体的な参考事例として現在筆者が関わって制作

中の取り組みを紹介します。

資料1がそれです。実物のカラーでなく申し訳ありませんが、出来上がりは、A4横両面印刷を三つ折りにしたリーフレットです。まだ完成ではなく、これは3回目の校正原稿です。

宮城県大衡（おおひら）村には、トヨタ自動車東日本株式会社の本社があり、ここに一年を通して、宮城県内外から小学5年生が工場見学に訪れます。小学5年の社会科の授業で、日本の工業地帯と自動車産業について学習するので、実際に教科書に載っているような自動車の組み立て現場を見学に来るのです。

小学生たちは学校ごとに貸し切りバスで訪れます。トヨタ自動車工場本社入口で降りて工場内を見学し、またバスに乗って帰るので、そこが大衡村ということには知らずに帰ってしまいます。引率する学校の先生は、学習指導要領の教育内容を教育するのが役割なので、クルマがどのようにして組み立てられている

のか、完成したクルマはどのように運ばれていくのかを子どもたちが理解できればよく、大衡村について教える必要性はありません。

一方、大衡村からすれば、これほど多くの子どもたちが大衡村に来ているのに、そこが大衡村だと知らないというのは、これほどもったいないことはありません。学校教育が必要と思わないところにこそ、社会教育（地域教育）の目のつけどころが潜んでいます。

そこで、この事実に対して、大衡村の活性化支援で筆者が付き合いしている大衡村産業振興課の渡邊愛（めぐむ）課長さんに次のような提案をしました。

「トヨタ自動車の工場見学に来る小学5年生向けに大衡村を知ってもらおうリーフレットをつくって、関心持ってくれた子どもさんが、家の人に、『大衡村に遊びに連れて行って』とおねだりして、休日に家族で再びこの村に遊びに来てもらうという



資料1 大衡村のリーフレット校正原稿（3校原稿、三つ折り両面）表・中・裏

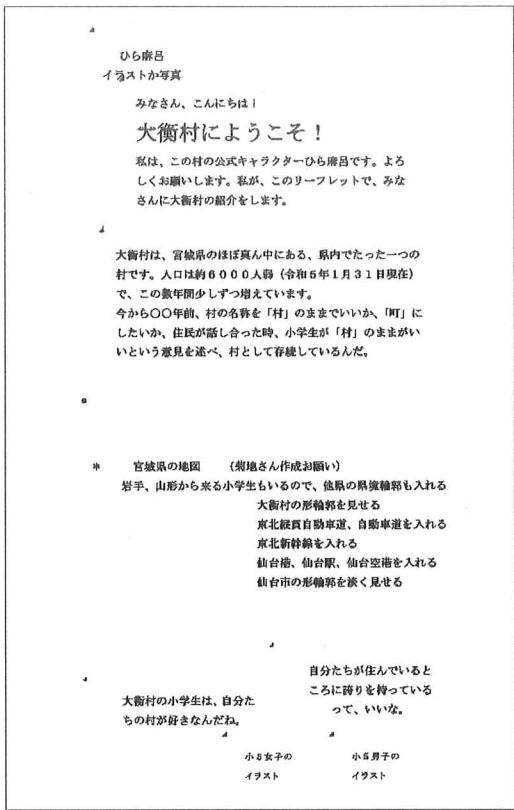


資料1 大衡村のリーフレット校正原稿（3校原稿、三つ折り両面）見開き

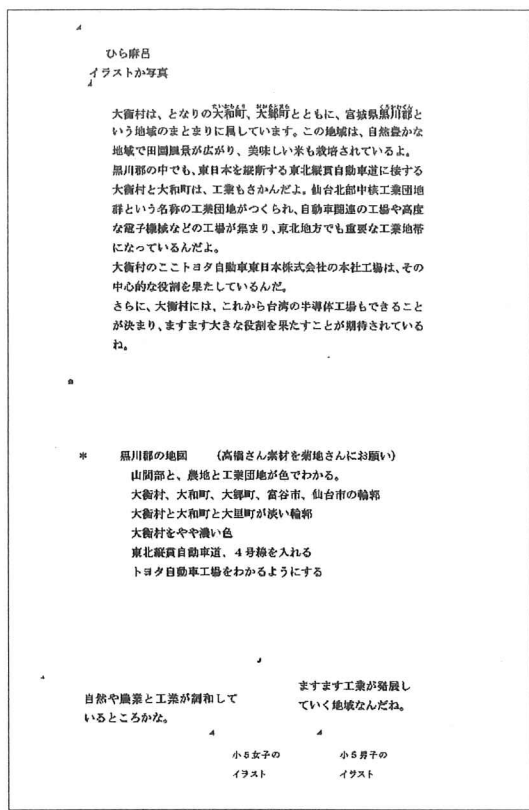
すよね。そのようなリーフレットは、きつと、村の子どもたち

にとつても、村を一層誇りに思う気持ち膨らませてくれるのではないだろうか？」

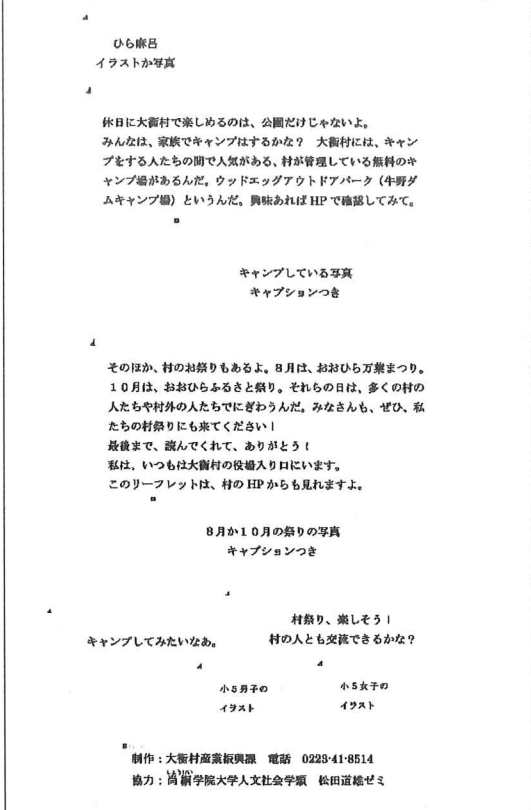
渡邊課長さんは、「その視点は気つきませんでした。さっそく、次年度事業に検討します」と返答し、実際に印刷作成予算がつき、こうして制作作業をしていく、それを役場担当の産業振興課・高橋栄悦係長さんと練り合い、高橋さんが村内の写真や地図素材などを用意し、業務を委託した小宮山印刷株式会社の菊地義隆さんがこちらの意向に沿って、デザイン・作成してくださっています。これから、村教育委員会の学校教育指導主事の先生にも確認点検してもらいながら、完成をめざしていきます。



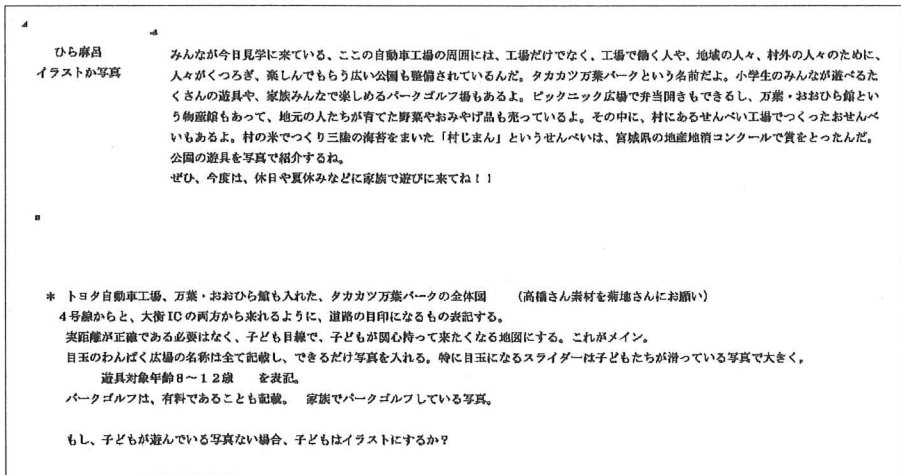
資料2 リーフレットの内容原案 表



資料2 リーフレットの内容原案 中



資料2 リーフレットの内容原案 裏



資料2 リーフレットの内容原案 見開き

「私たちの自治体には、自動車工場のように他からも見学に来るような施設はないから、このようなリーフレットは作れないな」と言う方もいらつしやるかもしれませんが、地域への愛着心（シビック・プライド）で

読者皆さんの中には、私たちの自治体には、自動車工場のように他からも見学に来るような施設はないから、このようなリーフレットは作れないな」と言う方もいらつしやるかもしれませんが、地域への愛着心（シビック・プライド）で

ここに住んでいようが、住んでいる当事者にとつては、「住めば都」で、何かにか、自分の住んでいるところに愛着を感じているはず。大きな施設や工場のあるなしに関わらず、自分たちの住んでいるところへの愛着を喚起しようという取り組み、その思いを他地域の人にも伝えようとする取り組みこそ、地域教育の大切な事業の一つなのではないでしょうか。

この大衡村の事例は、村の産業振興課が予算をとって行っている事業です。観光課が行うこともできるでしょうし、教育委員会が行うこともできます。子どもたちも制作に関わるような社会教育事業として行うこともできますし、学校教育の総合学習などでもできるでしょう。学校の授業で行っているタブレットの活用は、仲間と協力して作業を進めていくのにも便利です。子どものためのまちのリーフレットづくりは、いろいろな事業主体で制作することが考えられますが、どの場合でも、配慮

したほうがより効果があると筆者が考える点を以下に提案します。

- 1 細部にこだわる  
制作から校正段階で、細部にこだわるということは、たくさん視点から見つめていくということになり、リーフレットづくりという一つの作業を通して、もたたくさんのことを学ぶことができる活動になります。
- 2 利用者の立場で制作する  
ビジネスの現場では、お客様の立場に立つ、ユーザー（利用者）の立場で開発するなど、よく言われます。一貫して、この視点で制作作業を点検していくことによって、より活用される成果物になります。
- 3 外部者の意見を入れる  
例えば、子どもたちだけで制作してしまえば、達成感はあるけれども自己満足で終わるかもしれない、自分たちが気づかなかった新たな学びを得る機会がないとも言えます。地域内の人たちだけで制作しても同じです。

大衡村の事例でもわかりますが、世の中の仕事はすべて、分業と協力で成り立っています。一人ですべてを行う必要はなく、むしろ、人との協力をしていくことができるか、という力が大切にされています。それをわかりやすく体験できる取り組みにもなります。

地域に子どもの数が増えます減っていく今だからこそ、子どもたちが手にとるまちの紹介物をちゃんとつくり、子どもたちに活用してもらおうような事業は、もっと各地であっていいのではないのでしょうか？

（まつだ・みちお 皆さんのまちのリーフレットづくり応援します！）  
尚綱学院大学教授（宮城県）  
連絡先：  
m\_matsuda@shokei.ac.jp